お願いねがいぼし、白いご飯に合うおかずをください！

充椎十四

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ガラルのモデルはイギ〇ス……飯が美味しくないことで世界に名高い某国である。また、ポケモンには中〇や韓〇が元になった地方がない＝大陸系の調味料がない。

先祖代々貧困な舌を持つ転生ガラル人♀はツボツボを抱え、白いご飯を美味しく食べるために中華料理の基盤を作るのだった。

ムシャムシャをしたくて書いた。今は反芻している。

※グリーンのインド象表記は見なかったことにしてください。お願いします。

アローラに中〇が潜んでいることを知りませんでした。作者の調査不足です。見なかったことにしてください。

目次

お願いねがいぼし、白いご飯に合うおかずをください！ ―――― 1
ひどいやねがいぼし ―――― 41
ふざけろねがいぼし ―――― 61

お願いねがいぼし、白いご飯に合うおかずをください！

飯の話をするとしよう。栄養補給、お膳の賑わい。食い道楽の端から君に聞かせよう……君たちの食生活は祝福に満ちていると。腹減りっ子のみ通るがいい――

日本人のほとんどは海草を消化できるが、欧米人のほとんどは海草を消化できないらしい。逆に、欧米人のほとんどは乳糖を消化できるが、日本人の何割かは乳糖を消化できないらしい。牛乳を飲んだら腹を下す、というのは乳糖が原因である。

さて、今生の私はガラル生まれガラル育ち、三代遡ってもガラル人という生粋のガラルっ子だ。だから、幼少期に輸入食品店で見かけた海苔煎餅をばりむしゃ食べてくしゃみが止まらなくなった。

誰が見ても明らかなアレルギー反応だ。つまり、この体はヨードアレルギーで……ヨードたっぷりな海苔が食えない。その衝撃は大きかった。

――ご飯に海苔、ベストフレンドだ。お新香や明太子などもあるとより一層良い。

――お餅に海苔、無くてはならない存在だ。海苔のない醤油餅と海苔のある醤油餅では天と地の差がある。

――拉麺に海苔、当たり前の相方だ。海苔のない拉麺など、山盛りチャーシュー麺で

もなければありえない。

――お煎餅に海苔、ただの醤油かき餅より海苔かき餅の減りの方が速いことは日本人の誰もが知っている。海苔のあるなしで値段も変わる。

――何もなくとも海苔、海苔だけでおやつになる。無敵。軽くて持ち運びに良い。

――青のりなくして、たこ焼きやお好み焼きは存在しえない。

メカブ、アカモク、モズク、ワカメ、昆布、その他色々……それらを消化できない体質になってしまったことに、私は絶望した。何のために生まれて何のために生きるのかといえば、好きな料理を好きなだけ好きなように食べるため我々は生まれたのだ。好物を食えずして何が人生か。おおんと泣いたら両親に正気を心配された。

ガラルの飯が不味いとか不味くないとか、そう言う次元の話ではないのだ。私が食べたいと望む料理がガラルに存在せず、そして、私の好物を構成する食材の中に今の私では摂取できないものが含まれていることが問題なのだ。

さて、少し話は変わる。ガラルの飯マズについて、ガラルは産業革命の時に男も女もなく働くようになったことで料理に時間を掛けることがなくなったから飯マズになったという説があるが、そうではない。緯度が高く寒い土地だから食材が貧しく、歴史的に飯が不味いのだ。舐めてはいけない、ガラルは昔から飯が不味い――だからガラルの民は全体的に舌が貧しい。

よって、私の舌も貧しい。ママが作ってくれたカレーも、「どこが美味しいのかよく分からないが毒ではない」から食べているというレベルだ。生まれた時から慣らされてしまった舌は貧困を極めている。

とはいえ人の味覚が完成するのは十二歳あたりまでらしく、今の私は十歳。まだ味覚を育てられる歳で、そして――ガラルにおいては親元を旅立ちリーグ巡りができる歳だ。

私はポケ廃ではなく、適当にアニメを見て映画を観て「あー面白かった」で終わる程度のにわか知識しかない。トレーナーなど無理だ。推薦状を貰えるわけもない。しかし旅立てる歳だ。

親を「俺より強いやつに会いに行く」と口説き落としてカントー地方へ飛んだ。私は嘘は言っていない……「俺より（味覚が）強いやつらに会いに行く」のだから。

しかし、カントー地方に飛んだ私はまた新たな衝撃を受けた。

キムチがねぇ！　餃子がねぇ！　麻婆参鶏湯油淋鶏！　なんと大陸や半島由来の料理が存在しないのだ。何故ならポケモンワールドに中〇や韓〇をモデルにした地方が存在しないから。

私は和食が好きだ。米が好きだ。ありとあらゆる日本の食事を愛している……が、中〇料理や韓〇料理も好きなのだ。白いご飯を美味しく食べるためのありとあらゆる料

理が好きなのだ。

しかし、この世界には○華料理が存在しない。中○に該当する地方がない。つまり――中○料理に使われる調味料が存在しない。そんな……あんまりだよ。こんなのってないよ！

カントー地方の食堂でバイトして味覚を育てながら、想い出の料理を想って毎晩のように泣いた。バイト先ではホームシックと誤解された。

布団に入る度、前世では気楽に食べられた様々な料理が思い出される。

エビチリが食べたい……。ちょっと甘辛な、あのプルンプルンしたチリソースが絡むエビチリが食べたい……。煮凝りのようなソースをまとったエビが口の中で弾け、ソースとエビの味が絡み合うあの幸せ。そして忘れてはいけない白いご飯。最高ですか？

最高ですよ当然っすわ。マヨネーズ掛けても美味い。文句なし百点。ありがとう、そしてありがとう！

棒棒鶏も食べたい……柔らかい鶏胸肉に胡麻ダレを掛けて、揚げた唐辛子をちょっと散らすんだ。美味い。これは胡麻ダレでご飯が進むね、間違いない。胡麻の柔らかい味わいの中にピリッと唐辛子が入るのが好きなんだ、私は。人生にスパイスが必要なように棒棒鶏にもスパイスが必要、真理なのでこれテストに出ます。

冷やし中華なら作れるんじゃなかろうか。さっぱり醤油系のタレで――冷やし中華

と言えば盛岡冷麺も私は好きだ。牛チャーシューとか……あっ駄目だ。チャーシューがない。キムチもない。よってこの世界は地獄、はっきりわかんだね。冷やし中華ならまだいけそうな気がするが、調味料と具材に不安が残る。

餃子とラーメン、チャーハン……半ちゃんセットに追加注文で焼き餃子。鉄板である。地元の行き慣れた中華料理屋で頼む、定番中の定番。醤油か塩かは店によって変わるが、ラーメンに小盛のチャーハンが付いて、そこに餃子を追加する。炭水化物の暴力、腹回りを直撃する台風、まさしくデブのソウルフード。

ラーメンにはチャーシューが一枚か二枚に、青ネギ、味玉、海苔、メンマ。上に乗っている具材が既に食欲をそそる。スープを吸ってしなっとした海苔はそれだけで美味しく、ネギを絡めて啜る麺の爽やかさはいくら言葉を重ねても表現しきれない。チャーハンはタイ米より日本米の、パラパラでありつつもちょっともっちりした食感のものが好きだ。具はネギと卵だけのシンプルなのが良い。ちょっとチャーシューが入っているのも好きだがシンプルイズベストだ。焼き餃子は――柚子胡椒をちょっと乗せて、一口で食べる。そうすれば肉汁が皿に落ちることなく、口の中でジューシーな餃子餡が踊る。好き……。

カントー地方の薄味に慣れ、和食の味付けに舌を鍛えられ、かつての味覚をだんだん取り戻してきている――そう自覚すればするほど、この世界に存在しない料理への飢餓

感が募る。

私も前世では料理をしていた。もちろん家庭料理だ。だが、ただ家庭料理を作っている程度の人間がコチュジャンを作れるだろうか。甜面醤の作り方を知っているだろうか。――知る訳がない。つまり、彼らはもう私の手が届かない存在なのだ。創味のシャンタ〇やユウキ〇品の中華調味料が恋しくて恋しくて、毎晩枕が湿る。

おお、神よ。叶うならば私に中華料理の調味料を与えたまえ……！　そう願っていたのが誰か伝説のポケモンの目に留まったのか。実はガラルでねがいぼしを拾っていたけどダイマックスバンドにしていなかったのが功を奏したのか。ふらりと入った古本屋で、私は運命に出会った。

「日本語」で書かれた調味料の教科書や料理本が、叩き売りワゴンに並んでいた。

「おじさん、この本って」

「ああ、どこの文字でもない不思議な文字で書かれた本でな……。この文字を研究していた人が亡くなって、遺品整理でドカンとうちの店に来たんだ」

「――その研究者さんって、この本を読めたんですか?」

「いや、あの人は研究者ってもんじゃなかったよ。趣味でやってたんだ。読めたのかは知らんなぁ」

解読出来ていたならとっくにカントー地方に中華料理が広まっていたはずだ。つま

り、その亡くなった研究者（趣味）はこの本を解読できなかった。考えてみれば当然なのかもしれない……漢字ひらがなカタカナの三種類の文字がごっちゃになっていると普通なら思うまい。

研究していた人が趣味で集めていた日本語の本は全て私が引き取らせてもらった。料理とは関係ない本も混ざっていたが、久しぶりの漢字かな交じり文は私のテンションを爆上げにしてくれた。俺は中華調味料を作るぞ、ジョジョー！

発酵に時間を掛けている暇はないので、はっこうポケモンのツボツボを利用して豆板醤、甜面醤、豆鼓醤などなどを作る。素材のグラム数は分かっても、ツボツボで何日発酵させれば良いのかは分からない。そこらへんは手探りだった。

アルバイト以外の時間は全て調味料作りに注ぎ込み、バイト代を調味料の材料に使いきってしまったこともあった。私の命を繋いでくれたのはバイト先のまかないだ――店長には頭が上がらない。

そして、ああ、そして、やっとだ。私は中華調味料でもメジャーな物のうち七種類を安定的に作る事に成功した。スプーンの先端にちょっとだけ乗せたＸＯ醤――ＸＯ醤はレストランやメーカーにより味付けが異なり、作り方は門外不出とされる。おかげで一番完成までに手間取ったのはＸＯ醤だ。――をじっくり味わう。これこそ私が求めた味！

気が付けば、私は今や十四歳。ポケモンバトル？　ふざけるな！　ツボツボの捕獲と飼育しかしていない私がバトルなどできるわけがないだろう！　トレーナーゴーホーム！

ちなみにキムチはまだ作れてない。調味料を優先したから仕方ないね。

しかし、こうして調味料を作ったは良いが、使い方や味が分からなければ買い手がつくわけもない。それには自分で店を持って料理を提供するのがてっとりばやいのだが――店を構える金がない。アルバイト先の店長に調理師免許を取れと言われて免許を取得しているけど、金がない。

悩んでいた私に店長は優しかった。

「うちの店で、お前の創作料理を出しゃ良いじゃねぇか」

「良いんですか」

「お客さんに出せる味かを先に確認させてもらうがな。お前なら変な味の物は出さんだろう」

「て、店長……！　有難うございます！」

感動で涙が出た。私の涙腺は以前からガバガバだが、店長の優しさを身に受けて泣かないなどガバガバ涙腺でなくともありえない。マジで神。

店長の太鼓判を貰ってメニューに加えたのは回鍋肉と棒棒鶏。品数を多くすると手

が回らなくなる自信しかなかったので二品に抑えた。両方の料理とも、餃子のように皮を作らなくて良いし、包む手間もない。回鍋肉は豆板醤と甜面醤の二つを使った少し甘めの味付けで、棒棒鶏は芝麻醤のみ。

「このホイコーローって飯、うまいな！　甘辛いタレが肉やキャベツに絡んで飯が進む！」

「胡麻の風味がすごく濃くて、でもさっぱりしていて凄く食べやすい。ホイコーローもバンバンジーも野菜を食べる手が進む料理ですね」

常連客にも好評を得て、私は泣いた。私の四年はこれだけでもう報われたと言って良い。おおんと泣く私の背中を店長や常連客が叩きまくってくれ、三日くらい青あざが消えなかった。カントー人はみんな力が強すぎる気がする。

それからレジ横に並べた中華調味料は次々売れていき、需要に対し供給が間に合わなくなっていった。想定内だ。中華調味料のあるなしで料理の味わいが全く変わるのだ、一度美食を経験した者はそうそう簡単に元の粗食に戻れない。

皮算用で高笑いしながらツボツボを捕獲していたのが悪かったのか、ジュンサーさんだけでなくジムリーダーまで呼ばれる騒ぎになった。料理好きの爽やかジムリ――タケシさんである。ちなみにうちの常連で、調味料もお買い上げ頂いている。

私の馬鹿らしい行動で迷惑をかけてしまったジュンサーさんとタケシさんに十回以

上頭を下げまくった。申し訳な過ぎて涙腺が決壊しそうだ。
「もう謝らないでくれないか、何もなくて良かったってことで良いじゃないか。そうだ、明日知り合いを連れて店に行くよ」
「有難うございます！　お待ちしております!!」
　翌日、タケシさんが連れてきたのはトキワジムのジムリーダーことグリーンさんだった。おま……ちょ……ひえ……リアルグリーンさんとか心臓に悪い。この人が一番好きなんだぞ、私は。同じく一位にレジェンドのレッドさん。
「君が、最近はやりの調味料を生み出した料理人か」
「ふぁい！　そうでございます！」
「ふっ、おれさまを前にして緊張するのは分かるが、そう緊張されて味が分からなくなられては困るぜ。新たなニビ名物だというホイコーローとバンバンジーを頼む」
「はい喜んでー！」
　どこの焼肉屋だ。クールにならねば。クールだ、ビー・クール。落ち着け。落ち着くんだ。
　深呼吸を繰り返し、イメージするのは常に最強の自分だ。
「君、トキワで店を開かないか。土地と店舗なら心配しなくて良いぜ、全部おれが用意してやる」

グリーンさんの言葉に、私は目を剥いて倒れた。

春巻き食べて現実逃避したい。

そんな風にまあ初対面で気絶をかましたが、グリーンさんはパトロンになってくれた。ジムリーダーの資金力のおかげで創業できた我が社「中華一番」の調味料はカントーを起点にしてホウエン、ジョウト、シンオウでも瞬く間に流行った。この世界の食材に置き換えて作り直した中〇料理のレシピ本は増版を重ね、他の地方でも翻訳されてバカ売れしているらしい。

なにせ私は自分で料理するより人に作ってもらう方が好きだ。人生を捧げられるほど料理が好きなわけじゃないし、どちらかと言えば他人が作った美味い飯を食べる方が好きなのだ。積極的にレシピを公開し、料理人の皆さんが腕を磨いてくれるように促しているのはそのためだ。

おかげで腕の良い料理人が作った美味しい〇華料理を気軽に食べられるようになり、隠し味に醤を使った複雑な味わいの和食も増えた。良いことだ。

――ところで話は変わる。パンと言って我々が思い浮かべるのは食パンだろうか、菓子パンだろうか。まあ日本で生まれて日本で育ち、日本のスーパーやパン屋でパンを買っている限り、認識はそう変わるまい。パンとは、しっとりして柔らかくモチモチしたものである。日本人にとってのパンとはそういうものだろう。日本をモデルにした

カントー地方のパンも同様のようだ。

だがしかし。我が生誕の地ガラル地方やガラルと海を挟んだ隣のカロス地方、イッシュ地方などでメジャーなのは「ふわふわしっとりもちもちパン」ではない。バリバリで硬いバゲット系のパンがメジャーなのだ。固い皮で唇が切れるあれだ。

我が地元スパイクタウンでも、贔屓のパン屋に並んでいるのはオリーブオイルをかけて食べるのに向いているパンばかり――パン・ド・ミもあることはあるが、それでも食パンより硬い。

パン・ド・ミのサンドイッチはもちろん美味しいが、スイーツサンドには向かない。よって我が地元でスイーツサンドなどというものが生まれる余地は無かった。しかしここはカントー地方である。柔らかい食パンの文化が、この地にはある。

――トキワがスイーツサンド発祥の地になり、グリーンさんから満面の笑みと「良くやった」というお褒めの言葉を頂いた。感動のあまり吐きそうになりながら泣いた。

グリーンさんが褒めてくれたことだし、今度は目先を変えてスイーツで革命を起こせないだろうか。この五年近くは白いご飯のお供のため脇目も振らず生きてきたため、人生の三分の一をカントーで暮らしているのにも関わらず私はここらの甘味について全然詳しくない。待ってろ私のスイーツちゃん、と老舗のお菓子屋さんに行き――そりゃそうだと肩を落とした。

中〇があってこその和菓子と言えば羊羹だと思っていたが、お饅頭もだったとは知らなかった。米の長期保存が原点の餅菓子や回転焼き、岩おこしはあるものの、お饅頭や大福、かりんとうなどが存在しない。当然ながら月餅もない。

〇国がこんなにも日本の食文化に影響を与えていたとは予想以上だ。

スイーツに目覚めた私だが、古本屋で見つけた料理本にお菓子のページはなく、毎日の食事を漫然と作るだけだった私が羊羹の作り方など知る訳もない。私が作れるのはお萩くらいだ。だから神様、お願いしマッスル！　私にお菓子のレシピ本をください……！

しかし祈っても神様はそんなに優しくない。ねがいぼしは黙りで、「日本語」の本はいくら探しても降ってこなかった。畜生知ってたと泣いた。

和菓子について真剣に考えたせいだろう、それから毎晩のように和菓子の夢を見るようになった。こしあんでも粒あんでも良いから羊羹が食べたい。ほっこり安らげる羊羹が食べたい。生姜がぴりっと効いたういろうが食べたい。優しい甘さの桃饅が、粒々とした食感の桜餅が、サツマイモのゴロゴロ入った芋餅が――煎茶に合う様々なお菓子が欲しい。

酸味の強い苺が素晴らしいアクセントとなり後味が爽やかな苺大福。さくさくとした皮とねっとりした餡が鐘を鳴らす最中は、求肥や栗が入っているのも好きだ。焦げの

香り豊かなみたらし団子。さっくりとした食感の、黒棒やげたんはと呼ばれる黒糖のふ菓子。その他たくさん。

――ああ、口が甘味を求めている。私は甘味に飢えている。誰か甘味をくれ……私に甘味を！

すっかり甘味に思考が染まりきり、甘いものを求めてヨタヨタと街をうろつけば背後からグリーンさんにモンスターボールを投げつけられたあげく「ベトベトンかと思ったぜ！」と言われた。年頃の少女に向けて掛けるべき言葉ではないが、グリーンさんがグリーンさんであるだけで尊いので私は寛容な心を持って許した。

「グリーンさん、美味しいお菓子を置いているお勧めのお店はありませんか？」

「お勧めね……最近できた店なんだが、カロスの有名パティスリーで修行してきたというパティシエのケーキは絶品だったぜ」

「ほう、ケーキ。良いですねケーキ」

特に好きなのはクリームたっぷりのショートケーキだ。ガラルのショートケーキはビスケットでクリームと果物を挟んだものなのだが、私はスポンジ生地のふわふわした苺のショートケーキが一番だと思う。ガラル式が不味いわけではない、単に三つ子の魂百までというだけだ。私にとってのショートケーキは日本式。

私は日本式を求めていたのだ――だが。

「ショートケーキはどこに？」
「なんだ、そのショートケーキって」
私が欲しいのはフランス式ショートケーキのフレジェではなく、日本式ショートケーキだ。スポンジ生地にクリームと苺を挟み、表面が真っ白になるまでクリームを塗りたくり上にいちごを乗せたアレだ。
グリーンさんの反応からして、日本式のカントー地方近辺にショートケーキが存在しないのは確定。私はおおんと泣いた。もちろん店内で泣いたら迷惑なのでフレジェを買ってグリーンさんと別れ、公園のベンチまで行ってから泣いたとも。私はマナーの良い客なのだ。
ああ、愛しのショートケーキ。君がいない人生なんて焼肉のたれがない焼肉みたいなものだ。何故ないんだショートケーキ……シンプルな見た目のくせして奥深いショートケーキよ！　生乳由来のもったりした生クリームは少し甘味が強めで、しっとりした卵色のスポンジ生地に挟まれた酸っぱい苺と一緒に口に含めばそこはラビリンス。迷子になったまま帰りたくない。
上に乗った苺は始めに食べるか最後に食べるかはたまた途中で食べるか――中段の苺は酸っぱい方が良いが上に乗っている苺は甘いものじゃなければ嫌だ。酸っぱい苺は甘いものに包んで食べたいんだ、甘い苺で作った苺大福とかふざけるんじゃない。大

福の苺は酸っぱいから良いのだ、ケーキの中の苺も酸っぱいから美味いんだ。美味しい林檎ジャムは酸っぱい紅玉から作るから美味しいのと同じように。

ショートケーキフォーエバー。

あと店内に見当たらなかったケーキがあったような――そうだ、チーズケーキだ。ベイクドチーズケーキはあったのに、スフレチーズケーキがなかった。ふわふわでしっとりで口に入れたら溶ける、あのスフレチーズケーキがなかった。レアチーズケーキもなかったような気がする。レアチーズケーキは海外でも一般的なものだとばかり思っていたんだが、もしかして日本生まれだったのだろうか？　チーズケーキと言えばスーパーの乳製品コーナーにあったチーズデザートは手軽で美味しかった。特に四種のベリー入りの甘酸っぱい味わいは、こんなお気軽にお安く楽しめてしまって良いのかと思ってしまうクオリティだ。

あとは……ミルクレープもなかった。モンブランはあったのに。ミルクレープと言うからにはミルフィーユと同じくフランス生まれに違いないだろうに何故なかったんだろう。単にパティシエの気まぐれで店頭に無かった、とかそういう理由だったら嬉しい。

気まぐれなら良かったのに、気まぐれではなかった。私の目は死んだ。

ケーキなんて作れんぞ、私は。

私の知る洋菓子も和菓子もこの世界では存在しないものが多く、しかしお菓子作りの素人である私は作り方を知らない。手元にあるのは数十体のツボツボだけ。どうしようもなさここに極まれり。ちなみに私が作れるお菓子はホットケーキミックスを使ったクッキーやマフィンくらいだ。

素人だから出来ない、技術がない、知識もない。ならばどうするか。――プロにお任せしてしまえば良いのだ。プロの技術を持った職人にイメージを伝え、後はお任せしてしまえば良い。

作りが単純なので頼んでから三日後には完成したミルクレープはともかくとして、お饅頭が出来たのは思ったよりすぐ――といっても数ヶ月後――だった。肉まんのレシピのお陰で饅頭の皮は基本を転用できたそうで、それからは怒涛の勢いで次々と私の知る和菓子やらケーキやらが完成していった。しかしこうして新しいお菓子が増えていくにつれ、お世話になった店長やバイト時代からの知り合い、お菓子職人、トキワ商店街の皆さんの態度がだんだん変わっていった。

粗野に扱われるようになったわけでも、距離を置かれるようになったわけでもない。ただ、どこそこの男と結婚しないか、という見合い話を持ってこられるようになったのだ。

「他所に行かせてなるものか、という執念を感じます……」

「はっはっは、君は今ではカントーが誇る調味料の創作者で料理研究家だからね。たとえそれが君の地元でも、他の地方に君を引っこ抜かれたくないのさ」

うどんと蕎麦以外の麺類が食べたくてパスタのレシピを参考に中華麺を作っているのだが、そう簡単に成功するものではない。失敗した麺の消費に付き合ってくれているタケシさんとちゃんぽん麺もどきを食べながら愚痴ると、タケシさんは楽しそうに笑い声を上げた。

「ポケモンバトルで言えば、君はカントー地方が誇るジムリーダーなんだ。みんな、ここに君が定住するという確信が欲しいんだよ」

「その気持ちはまあ分かるんですけどね、でもだからって見合いはご遠慮させていただきたいですよ。私まだ十六歳なんですから」

――イッシュやカロス、アローラが気にならないとは言わないが、私は白いご飯がある場所に骨を埋めたい。

また、工場や人員を手配してくれたグリーンさんに後ろ足で砂を掛けたくないからカントーを離れるつもりは一ミリもない。旅行には行くかもしれないが定住はしない。そのつもりだ。

「ガラルで暮らしたいとは思わないのかい？」

「ないですね。そろそろ一度里帰りでもして親や友人連中とは会うべきかな、とは思い

ますが」

なにせガラルはカントーから遠く、カントーの食材はどこにも売っていないのだ。もちろん醤油もない。血潮が醤油で肉体が米で出来ている私はガラルで生きていける自信がない。

「里帰りするなら早い方が良いんじゃないか。たしか、カントーに来てからまだ一度も里帰りしていないんだろう？」

「そうですね……六年も離れていたら親からも顔を忘れられそうですし、近々予定を組んで帰省します」

「そう簡単に家族の顔を忘れやしないさ。これまでずっと働き詰めだったんだから、実家でゆっくりしてくると良い」

果たして実家でゆっくりできるだろうか。母は「独り立ちした娘が会いに来てくれたんだもの、今日は腕によりをかけるわよ」とか言って不味いとも不味くないとも言えない微妙な料理を増産するだろうし、父は「ガラルの味が恋しいだろう？」とか要らない気づかいをして結構不味いお菓子を買って帰ってくる可能性が高い。

私には勿体ないほど良い両親なんだが、ガラルで生まれ育った二人の味覚と、カントーで鍛えた私の味覚は違う。食事の時間は地獄になるだろう。

「いやあ、君を育てた土地だからきっと料理が美味しいんだろうね。俺も一度ガラルに

行ってみたいものだよ」

「はい？」

空耳か聞き間違いだろうか、ありえない言葉が聞こえた。

「ガラルの料理は美味しいんだろ？　君のような料理の天才を育てたんだから。俺の知り合いには君の地元に行ってみたいと思っている人は多いよ」

それは誤解だ！　一体どうしてそんな誤解が生じたんだ!?　ガラルの料理は一部を除いてだいたい不味い――口が滑った、美味しいとは言い難い微妙な料理だ。三日くらいなら耐えられるだろうが、一週間以上ガラルの料理が続くと心に隙間風が吹き込み始める。むなしさと苦しさと言い切れなさが胸の中をもやもやと満たすようになる。あれはそういう料理だ。

少なくともこの数十年は、まともな料理が海外から流入したことによりウナギの煮凝りや星を見上げるパイやハギスのような不思議の国の料理が食卓に並ぶ事は無くなったが、そう簡単にガラル人の味覚が変わるわけもない。本来ならば美味しいはず料理でも味見する人間の味覚が貧困なら、本来の美味しさが消え失せる。

「違うんです。ガラルはそんな場所じゃないんです……！」

どうにか、どうにかせねば。カントー人がガラルに過大な夢を持っている現状をどうにかせねば。

大声で「ガラルの飯は不味い！　食事の時間がつらい！　心が死ぬぞ、これ本当！」と叫びまわるのはどうだろう――さしたる効果が期待できないだけならまだ良いが、ガラル地方での私の名誉が地に落ちる。スパイクタウン出身者はこれだから、とか言われてしまう。駄目だ。

ガラル地方全体の味覚を改善するのは――とんだムリゲーだ。私一人の努力で解決できることではない。百年計画なら出来なくもないだろうが、今すぐなどどだい無理な話。しかしガラルを愛する一人として、「うげ～ガラル地方って世界一メシマズだわ～」などと他の地方の奴らに言われたくないという気持ちはある。

何かないだろうか。ガラルで簡単に受け入れられて、なおかつ他の地方の者が食べても美味いと感じる料理は。

何か……あるわ。

カレーライスだ。

カントーにはカレーライスがあるが、これはガラルのカレーが元になった料理だ。つまりガラルには既にカレーが存在する。私は幼い頃から母の微妙に不味いカレーを食べてきた。

だから私がガラルに導入するのはこれ、『キャンプでカレーライスを作り食べるのがガラルの美食』ブームだ。

カレーが既にあるのに、何故あえて屋外でのカレーライスを推すのか。その理由は四つある。

一つ目。カレーはよほどの失敗をしない限り美味しい。

二つ目。ガラル人に調理させる必要がない。カレーライスを食べる本人が自炊するから、味がまともかどうかは本人の責任であって、ガラル人の味覚は関係ない。

三つ目。屋外での食事は何故か美味しく感じられる魔力を持っている。例えるなら家での焼肉や店の焼肉より屋外で食べるバーベキューの方が何故か美味しいように感じ、満足感を得られるようなものだ。

四つ目。原作ゲームで主人公たちがキャンプしながらカレーライスを食べていた。私はゲームをプレイしていないが、ストーリーや設定は履修済みだ。

朝食はまともで美味しいから放置で良いが、残る昼食と夕食はちょっとアレだから『ガラルでブームの自炊カレー』で誤魔化すしかない。都合が良いことに従姉がスパイクタウンのタウン情報誌で編集をしている。彼女には屋外カレーブームの火付け役になってもらおう。

そんな風に計画を練りながら帰ってきました、ガラルのスパイクタウン。カントーから距離的にかなり遠いこともありガラルでうちの調味料を取り扱っている店は一つもないが、実家にはもう三度ほど調味料の瓶を送っている。料理に使ってくれていると思

いたい。

思いたかった。

「ちょっと舐めてみたらすっごく辛かったし変な味だったから、使わずに仕舞ってあるの。ごめんね」

そりゃそうだ。調味料単品で食べるものではないのだから当然だ。——だから母が仕舞ってしまったのも仕方ない、仕方ないんだ……。ちょっと泣いた。

中華調味料はマーマイトより料理に使いやすいはずなのにね。

六年ぶりの我が家は以前と変わらず、母の趣味のパッチワーク・キルトが家のあちこちに飾られている暖かい場所だ。帰省の日を伝えていたお陰で近所に暮らす親戚もうちに集まり、まともで美味しいミンスパイから硬い・パサパサ・不味いのキューカンバーサンドイッチまで、色々な料理がテーブルに並んでいる。

「姉ちゃんの子供！——もしかしてあの時お腹の中にいた子？」

「そうそう。あんたが六年も帰ってこないからさ、もう六歳。ネズ、初めましてしな」

「ネズ、六歳……です」

「わー可愛い！　初めましてネズくん！　私はネズくんのママの従妹だから……おばちゃんだね」

「何言ってんの、十歳しか変わらないんだし、お姉ちゃんって呼ばしぇとけ」

従姉の息子がネズだった件。ネズ君はまだ六歳なのに、いかにも「私は神経質です」と言わんばかりの顔付きをしている。自分が責任を負う必要のないことも背負って苦労を重ねそうだ。初めて会うおばを相手に緊張しているだけなら良いのだが。

ネズ君は六歳。ということは、ガラル編のソード・シールドまで少なくともあと十年はある。チャンピオン・ダンデが今いくつなのかは分からないが、ダンデ含むネズたちはゲームの時間軸で二十代前半かそこらだろう。

片手では足りない年数離れていた田舎は今も人で溢れ、ジムチャレンジの季節でもないのに、庭から見える塀の向こうは騒がしい。

夕食は私が作った。母は「疲れてるでしょ」とか「休んでていいのよ」と言ったが、これはそう言う問題ではない。調味料の引き出しの奥に仕舞いこまれていた調味料を使って鶏肉とジャガイモのカシューナッツ炒め、酢豚、ピリ辛ソースの若鶏の唐揚げを作り、カントーで買ってきたパックのこし餡を使ったゴマ団子をデザートにした。何故このチョイスかと言えば単に私が食べたかったからだ。カシューナッツぽりぽりうまうまー！　なお、私は栄養学なんて履修していないので食べ合わせが良いかどうかは知らない。

こうしてガラルに帰省し料理を作ってから思い至るのは遅すぎるのだが、私は味覚をカントーで鍛えたからこれらの料理を美味しいと思えるのであって、生粋のガラル人は

この料理が美味しいか不味いかを理解できるのだろうか。不安になってきた。そして不安は的中した。

「お姉ちゃんすごい。人参が甘か！」

「君のような将来有望な人材がいてくれてうれしいよ、ネズ君！」

ありがとう子供、ありがとう成長途中のピュアな味覚。肯定的な反応をくれたのはネズ君だけで、両親含む親類全員が「ふーん、変な味。まあ食べられない事は無いけどね」という反応だったから、ネズ君の称賛なくば心が折れるところだった。

味覚がぶっ壊れた大人たちには期待できない――いや、逆に考えよう。若い世代の味覚にはまだ希望が残っている、と。彼らの味覚を底上げすれば自然と、不味い……もとい、味が残念な料理は淘汰されていくはずだ。神様仏様お星さま、私に革命を起こす力を！

味覚の自然淘汰の第一歩として、従姉に頼み込み、タウン情報誌『スパイクタウン・ダッシュ！』に『キャンプで手作りカレーを楽しもう☆　開放的なワイルドエリアで手持ちたちと一緒にカレー作り☆』という記事を載せて貰えるよう押し通した。原稿の叩き台とカレーライスのレシピは用意してある。料理上手なタケシさんお墨付きのレシピだから、作り手の料理スキルが底辺でない限り美味しいカレーライスが食べられるはずだ。

あとはワイルドエリアで手持ちのポケモンとカレーを作る様子の写真を撮れば良いだけ。簡単だ。

簡単だよ。

「姉ちゃん、姉ちゃんの手持ち借りて良い？」

「え、なんで？」

「私の手持ちポケモンはツボツボだけでさ。ツボツボだけなら何匹でも並べられるんだけど、それだとガラルらしさ皆無な写真になっちゃう」

「うわっ……偏執的な集め方……」

従姉にドン引かれつつも借りたポケモン二匹を連れ、ワイルドエリアの中でも比較的安全な区域でカレーを作る。

きのみを豊富に使ったカレーのレシピの端にタケシさんのおおらかな文字で「真心を込めるとさらに美味しくなるぞ！」と書かれている。タケシさんが可愛くて胸が苦しい……私の嫁になってくれないだろうか。自然と笑みが浮かび、両手でハートを作り「真心注入☆」と唱えた――この時の私はちょっとテンションがおかしかったかもしれない。

カレー鍋が光を発してドスンと揺れた。何が起きたんだ。本当に何が起きたんだこれは。

抜き足差し足でカレー鍋から距離を取る私に対し、従姉の手持ちポケモンのお二方はカレーに興味津々の様子。モルペコのペコリーノ（あだ名）がなんと鍋の中に頭を突っ込んだ。

「ひぃっ!!　何やってるのペコリーノ、ペッしなさい！　ペッして！」

しかしペコリーノは私の制止を聞かずゴクゴクとカレーを吸い上げていく。生まれてこのかたポケモンがカレーを食べるなんて話は聞いたことがない……いや、待て。そういえば剣盾ではポケモンもカレーを食べていたはずだ。『ミュウツーの食べる量が少なくて可愛い』とかいう記事を読んだ覚えもある。

この「真心込めた」カレーがゲーム剣盾で出たカレーなら、これは流行る。ポケモンと同じものを食べられると知ったトレーナーがカレーを作らずにいられるはずがない。間違いなく流行る。これでかつる。

従姉の手持ちのマッスグマのトラペジアス（あだ名）がカレー鍋をペロペロ舐めているのを写真に撮り、私はこの戦いの勝利を確信した。

親孝行の帰省を終え私がカントーに戻って一週間が過ぎた頃、従姉から電話が来た。

「あの記事が人気過ぎて、原稿書いた人に会わせろって大手の出版社が来たんだけど！　うちみたいな零細に！　あんたの名前教えて良い？」

「どうぞどうぞ。カントーで会社やってることも伝えておいてよ。うちの社名は『中華

一番』でホームページもあるよ」

従姉との通話を終え、鍋に正対する。

帰省中に減った商品を補給する作業に一週間近く取られたため、今日が初めての「カントーでも真心カレー（仮名）を作ることができるか」の検証だ。なお、ガラルの一般家庭の庭先で作れるかを検証した際はすべて失敗に終わった。

場所が成功や失敗に影響する可能性を考えて、工場の庭、今住んでる借家の庭、適当な道路の端っこで何度か試す予定だ。初回は工場の庭、青空が眩しい。

ワイルドエリアで作った時と同様、タケシさんのレシピ通りのきのみと具材でカレーを作り……両手でハートを作り叫んだ。

「真心注入☆ミ」

反応がない。ただのカレーのようだ。

それから数日後に行った検証第二回、借家の庭での真心注入も失敗。また日を開けて行った検証第三回、適当な道路の端っこでの真心注入も失敗に終わった。

「やっぱり駄目か……」

真心カレーはガラルのワイルドエリアでしか作れないのか。その場にしゃがみこみ深くため息を吐いて――顔を上げれば、登山用リュックを背負い、そのリュックの上にピカチュウを乗せた軽装の青年が立っていた。

もしかして：レッドさん。アイエェレッドさん！　レッドさんナンデ!?　シロガネ山でヒッキー生活しているのではなかったのか!?

「ご、ご用件は?」

「……」

この反応はレッドさんで間違いない。山を下りて来た理由などどうせ私には分からないから横に置いておいて、今はこの伝説の男をじっと観察する。――言葉で語らず目で語る彼は私のカレー鍋に視線をやり、私に目を戻した。

「お腹がすいているんですね?」

男はこくりと頷いた。

日本と同様、ここカントー地方においてカレーライスは国民食だ。カレーが嫌いなカントー人などいない、というと言いすぎだろうが、私の知っている限りカレーを苦手としている人はいない。つまりカントー人全員がカレー好きと考えて良い。

ところでエル知っているか……カレーは飲み物なのだ。食べ物ではない。カレーをカレー以外の飲み物で例えるならスムージーかドリンク剤だろう。ごくごく飲めて、野菜が採れて、栄養豊富で、なんと動物性プロテイン配合。スムージーで一食置き換えダイエットしようと考えている人はカレーを飲めば良い。

ルゥにターメリックが入っているので肝臓に優しい。数十種類のスパイスが組み合

わされたルウにより、発汗作用、整腸作用、低血圧改善その他様々な効能がある（個人差が有ります）。ドリンク剤を飲むより先にカレーを飲むべきだ、そうだろう。

それだけではない。カレーはソース――調味料としても優秀だ。ご飯に、トンカツに、うどんに、ピザに、グラタンに、コロッケに、春巻きに、掛けたり混ぜたりすることで様々に表情を変える。醤油や味噌には劣るものの、カレーは調味料として応用の幅が広い。白いご飯と共に食べるだけではないのだ、カレーは。

以前、私が独自で行ったカレーに関する調査で、二千九百人に質問をし（閲覧数）四百四十の回答を得た（Ｐｉｘｉｖアンケート機能利用）。そのうち約五割が「カレーといえばカレーライス」と回答し、「カレーは栄養ドリンク」と回答した割合と「カレーは調味料」と回答した割合が約二割ずつ。「カレーはスムージー」という回答は一割に上った。なお、カレーのことを甚だしく誤解しているとおぼしき回答は無効票として処理した。

このことから分かるのは「カレーは飲み物だ」と認識している層はカレー常食者の内三割を占めている、ということだ。

「ご飯に掛けますか、それともマグで？」

男はキャンプ用マグカップを見た。私はマグにカレーを注ぎ、男に差し出した。

青空の下、無防備に晒された喉仏が眩しい。

「お代わりは」

無言で差し出されたマグカップにカレーを注ぐ。男はマグを左手で受け取ると、右手を差し出してきた。

「……レッド」

私はその手を握り返し、名乗る。

仲間って、素敵だ。

――基本のレシピは原則公開としているお陰か、カントー近辺の各地方でも饅頭やらショートケーキやらが食べられるようになった。ジョウト土産の「いかりまんじゅう」なる饅頭を煎茶と共に頂き、余は大変満足である。

「研究所からポケモンが盗まれた、ねぇ」

母から行儀が悪いと何度も注意されたが、私はオヤツを食べながら新聞や本を読む派だ。まったりと時間を優雅に過ごしているような気持ちになれる。

ばさりと広げた町の広報に、ジョウト地方にあるポケモン研究所からポケモンが盗まれたと書いてあった。気を付けましょうと注意喚起されても何に気を付けろというのか。ジムリのグリーンさんやシロガネ山ヒッキーのレッドさんがいることから赤緑は終わっている、つまりロケット団は解体されたはず。カントー地方の危ない組織はもうないわけだし、さして危険でもない単独犯だろう。

いや待て――ジョウト地方のポケモン研究所はワカバタウンのウツギ研究所だ。なるほど、金銀が始まったということか。シルバーがポケモンを盗み、ゴールドの冒険が始まるのだ。

「待て、待とう。今が金銀ならグリーンさんたちは現在十四歳……!?　二つ下の出す貫禄じゃない。同い年か一つ下程度だと思ってたのに」

私がせっせと調味料作りに没頭している間に金銀が終わったのだろうとばかり思っていたが、なんとまさか二歳下だったとは。まあ、今更年上ぶるつもりはないから気にしないことにしよう。

それより重要なのは、第三回「真心カレー」検証で親しくなった（）レッドさんから貰ったものについてだ。シロガネ山で引きこもりをしている彼の食生活を支援するため近所のエスパータイプ廃のお姉さんからフーディンを借りて宅配をしたところ、一週間後にレッドさんからレベル七十のフーディンが届いた。今度からはレッドさんのフーディンで物資を送れということだろうが育成が早すぎる。それと、どうやってユンゲラーから進化させたんだ。通信交換で進化するポケモンじゃなかったのか。

私の手持ちに加えて良いということなので有難くフーディンを頂き、フーディンに家事の手伝いも頼んだりしてはや一月。――この快適さから抜け出せなくなった。

一人暮らしでは炊事洗濯掃除その他、様々なことを自分一人でやるしかない。むろ

ん、結婚などで同居人がいてもそれがダメ人間の場合は逆に仕事が増えるだけで何の役にも立たないが、普通の感性を持つ常識的である程度の思いやりを持つ人間ならゴミ捨てやら風呂掃除やら食器洗いやら洗濯物干しやらをするだろう。

一人での生活は案外寂しい。数十匹のツボツボがいるとはいえ会話相手になるわけではない。

そこに現れしフーディン（レベル七十）。痒い所に手が届くとはこのことだ。高い棚の上の物をサイコキネシスで取ってくれるし、掃除機をかけてくれるし、買い物メモを渡せば買い物をしてきてくれる。毛があるから料理や皿洗いなどの手が濡れる家事はしないもののそれ以外の家事を手伝ってくれる。

フーディンのいる生活から抜け出せなくなりそうだ。日々のお礼の気持ちを込めて真心カレーを作りたいのだが、今のところガラルのワイルドエリアでしか成功した例がない。先日わざわざカントーまで取材に来たガラル・エキサイト・プレスの人達も「ガラルの他の地域ではカレーに真心を込められない」と眉をハの字にしていた。

毎日お世話になっているフーディンに真心カレーをご馳走したい。もちろん前からの手持ちであり、調味料製造に従事してくれているツボツボたちにも真心カレーを作ってやりたい。みんなと一緒にカレーを食べたい。しかしガラルのワイルドエリアでしか真心カレーは作れない。どうすれば真心カレーを手持ちたちと食べられるだろうか。

――そうだ、ガラルに行けば良いじゃないか。フーディンやツボツボを連れてガラルに旅行に行けば良いのだ。そしてワイルドエリアでカレーを作れば良いのだ。カントーで作れないならガラルに行けば良いじゃない。マリーアントワネットもこう言っていた。

そうと決まればもはや憂いはない。社員に五日の特別休暇を出し、手持ち全員を引き連れてガラルに行こう。福利厚生だ。今すぐは無理だが来月の半ばにはガラルへ跳ぶのだ。

一人で行くのもなんだから誰か誘おうか。グリーンさんは駄目だろう、ジムリーダーをホイホイ連れ出すのは憚られる。同様にタケシさんも止めよう。最近カスミさんと良い感じらしく惚気が煩いし、浮気を疑われては困る。

安い便箋に旅行先やその日程、目的について書き、それを四つ折りにする。

「フーディン、レッドさんにこれを渡してくれる？」

任された、と頷いたフーディンが屋内からどろんと消えた。

ぶっちゃけたことを言えば飛行ポケモンに乗った方が速い空の旅を終え、ガラル国際空港まで着いた。座りっぱなしで疲れたらしいレッドさんが肩を回す間、ピカチュウはレッドさんの頭の上に移動している。可愛い。

預け入れ荷物を受け取ったあと、改めて今回のガラル旅行の注意を伝える。

「えー、先日も言いましたが、ガラルの飯という飯はだいたい不味いです。朝食と三時のおやつとジャムと一部の料理はまともですが、ほとんどの料理は美味しさと程遠く栄養補給ができるという点しか魅力がありません。味がどうであれ食べてみたい、と思う料理が有ったら私に言ってください。不味い料理の場合は分けっこしましょう」

レッドさんが何か訴えるような目を向けた。

「美味しいものを共有するのも楽しいですが、不味いものを共有するのも楽しいものですよ。一緒に悶絶しましょう」

渋々とした様子で頷いたレッドさんを連れて今度は列車に乗り、実家に着替えやらの荷物を預けてワイルドエリアに繰り出し……人の多さに目を剥いた。若いトレーナーから腰の曲がったトレーナーまで、老若男女のトレーナーがあちこちでカレーを作っている。

空いた場所がないので奥へ奥へと向かった結果、なんとハシノマ原っぱまで来てしまった。

「では、今日はこれ、真心カレー誕生のきっかけとなったタケシさんのレシピでカレーライスを作ろうと思います」

ボールから出した我が手持ち――二十体以上いるツボツボが一斉に前足を打ち合わせて拍手をくれ、フーディンもスプーンを手ににっこりとしている。

「タケシさんのレシピではいくつかのきのみを使うんですが、今回は持ってきていません。木を揺らして拾いましょう。ところで、レッドさんはヨクバリスというポケモンをご存知ですか？」

首を横に振ったのでさもあらんと頷く。

「ヨクバリスはガラルのみに生息する欲深いポケモンです。毛並みが悪く、いかにも欲深そうな体格をしているポケモンなので見ればすぐに分かります。うっかり木を揺らし過ぎると木から落ちてきてきのみをかっさらっていきますので、揺らし過ぎに注意してください」

レッドさんとは二手に分かれ、手持ち全員で木を囲み……幹を蹴りつける。ぼろぼろときのみが落ちてくるのをフーディンがねんりきで籠に投げ込んでくれる。

私はヨクバリスが落ちてくるほど揺らさなかったので平和裡に収穫を終えたが、離れた木の下ではレッドさんのピカチュウがヨクバリスをタコ殴りにしていた。一方的な戦いに草も生えない。

満身創痍のヨクバリスがヨクヨクと……間違えた、よろよろと木に登っていく姿を見送る。ヨクバリスの食べ差しを除いても十分すぎる量のきのみを得たので調理開始だ。が、ポケモンの手助けは要らない。

「カレー作りは食材を切ったり皮を剥いたりという作業なので人間がやります。最後の

真心を込める時に皆の協力が必要なので、その時になったら呼びます。分かったら解散！　遊んできていいよ！」

ガラルに帰省した時に連れて行ったのはたった二匹のツボツボだけで、残る面々はカントーに残り休ませていた。カントーでの検証にも同じ二匹を同行させていたが、その二匹以外は初めてだ。詳しく説明をすれば手持ちたちはウンウンと頷いて離れていった。

遠い場所で「うわっなんだこのポケモンの群れ!?」とか「キャー触手だわ!!　スケベなことするつもりなんでしょ、エロ同人みたいに！　エロ同人みたいに！」といった声が聞こえてくる中、食材を切ったり炒めたり圧力鍋に入れたりという細かい作業をする。なお、カレードランカーとして当然のことだが食材は小さく切ることが重要だ。中まで火が通るのが速くなるからとかそういう理由ではない。具が大きいと飲みづらくて不便だからだ。

圧力鍋に蓋をしてからの仕事はたった一つ、火を絶やさないこと。ガスコンロに慣れた私は役立たずだがシロガネ山引きこもり生活で焚火の維持に慣れているレッドさんの焚火スキルは高く、一定の火力を保っている。

何度か中を確かめ具が舌で潰せるほど柔らかくなったところで、きのみをいくつか追加して味を調える。そろそろだと判断して指笛を吹けばどたどたと帰ってくるツボツ

ボの群れ、フーディンを添えて。

レッドさんの手持ちのエーフィ、カビゴン、フシギバナ、リザードン、カメックスも見守る中、両手でハートを作り叫ぶ。ツボツボたちは首を伸ばしてうねり、フーディンはスプーンを天に掲げた。

「真心注入☆」

光を放ちドカンと揺れる鍋――成功だ。レッドさんの視線が鍋から私に移動する。

「これで成功です。真心カレーは真心を注入することにより何故か光を放ち、何故か揺れます。何故か」

何故かは誰にも分からない。きっとゲーム上の都合だろう。

約三十匹分のカレーライスを注ぎ、我々の分はマグにカレーのみ注いだ。

レッドさんはピカチュウたちが美味しそうにパクついているのを見るとふわりと表情を和ませる。そうだろう、手持ちと同じものを口にできる喜びは他の何にも代えがたいほど素晴らしいだろう。私もそうだった。

レッドと私はマグカップでカレーを食う……否、カレーを飲む派だが、四百四十人の回答者のうち約五割はカレーをライスにかけて食べる常識人だ。右カレー左ヒラメと回答した五パーセントの方々はヒラメ×カレイの魚類カップルリング派の可能性もあるが、私が聞きたかったのは魚類のカレイの話ではなく料理のカレーについてだ。

圧倒的五割のカレーライス派に対し、たった一割のカレードランカーの立場は弱い。カレーライス派の者どもは「カレーにはライスがないと」だの「カレーをかけたオムレットも美味い」だの「カレーの国ではナンを付けるんだよ」だのと言うが、カレーの採り方くらい自由にさせろと言いたい。

「みそ汁とご飯で猫まんまを食べたい人」と「みそ汁を単品で楽しみたい人」がいるように、「カレーをライスに掛けたい人」と「カレーを単品で飲みたい人」がいるのだ。レッドさんと私は単品で楽しみたい人、それだけのことだ。

ちなみに飲むカレーは自家製でもレトルトでもどちらでも良いが、マグカップは金属製のものではなく陶器製や木製のものが良い。スープマグがある人はそれで。あと、初対面の時のレッドさんは平気でやったが、一気に飲むと火傷するのでゆっくり飲もう。

二人でカレーを飲みながらポケモンの様子を眺める。のどかだ。そうほのぼのとした時間に心癒されていたところに父から「母が好意で夕飯を用意している」旨の連絡が入り、背中が震えた。従姉夫婦も遊びに来るという。

「すみません、レッドさん。悲惨な味付けに悶絶することになると思いますが――お付き合い頂けますか」

ガラルで十年を過ごし覚悟のある私と違い、レッドさんはガラル料理初挑戦だ。身内を下げる文化圏のレッドさんは「不味い不味いと言っているが謙遜だろう」と思っているかもしれない。

しかし、たとえそうだとしてもレッドさんは頷いたのだ。頷いたからには最後まで付き合ってもらおう。

ガラルの飯の味を知れ。絶望とは是この一皿……レッドさんよ、刮目しろ。（舌を）焼き尽くすぜ！

レッドさんはトイレからなかなか帰って来なかった。だから言ったのに。

ひどいやねがいぼし

カントーから保冷ケースに詰めて運び、実家の冷蔵庫に保存しておいた今回の主役――何度も何度もタケシさんと失敗作を啜り、ようやっと完成させたそれの名は「中華麺」。むろん細麺から太麺ちぢれ麺まで揃えている。豚骨なら麺は極細のバリカタと決まっているからだ。

「お姉ちゃんの作るご飯美味しい」と言ってうちに昼食を取りに来たネズ君とレッドさんのため、芝麻醤とラー油、鶏ガラなどを使ったスープに肉味噌と縮れ麺……これらを使い作るのはそう、日本式の担々麺。そして焼き餃子だ。実家で埃を被っている我が社の調味料を使い、カレーに飽きた時にまともな料理を食べたい我々のため、ガラルで明るい未来が待っているネズ君の味覚のため、美味しい物を作るのだ。

下準備シーンなどさして重要ではないから飛ばすが、これだけは言いたい。餃子餡の挽き肉は多い方が美味しい。以上だ。

ところで、「餃子の皮」を食べるか「餃子の餡と皮の合体したもの」を食べるか「餃子の餡のオマケに餃子の皮が付いているもの」を食べるか。どれが良いかと言えばもちろん四番目の「餃子の餡のみ」が美味しいのは当然誰もが知っていることだろう。皮など

なくとも餃子は美味い、皮はおまけよ。

しかし、餃子の皮なくばジューシーな肉汁は餡から流れ出るばかりで残らず、僕たち私たちが愛する餃子餡はただのパサついた肉の塊になってしまう。そこで餃子の皮が重要になってくる――皮が餡の肉汁を逃さないのだ。有難う餃子の皮！　君のお陰で餡の肉汁は守られた！

とはいえ肉汁を守るオマケだからと餃子の皮を甘く見てはならない。不味い餃子の皮で包んだ餃子はたとえ餡がいくら美味しかろうが不味くなる。太巻きの海苔が不味ければ太巻き自体が不味く感じられるのと同じだ。ああ、海苔を食べたい。お腹を下したとしても海苔を食べたい。……海苔の話は止めよう。

そういうわけで餃子の皮も重要だ。薄く、焼けばパリッとする餃子の皮も餃子全体を構成する欠かすべきでない一要素だ。

丁寧にかつ素早くひだを作りながら餃子を包み、ざっと百個ほど包んで餃子の準備は完了だ。担々麺のため中華麺を湯がきながら餃子を焼き、レッドさんとネズ君の担々麺を仕上げ、二人に今日の昼食『担々麺餃子定食』を出す。もちろんネズ君の分は体の大きさを考えて控えめな量にし、スープも甘めにしてある。

まだ若い二人にはこの定食の罪深さなど分かるまい……担々麺の麺、炭水化物。餃子の皮、炭水化物。白いご飯、炭水化物。そこに胡麻由来の芝麻醤やラー油、肉味噌、餃

子餡という脂と動物性たんぱく質の追い打ちだ。これは太る。体重を気にする女の子なら絶対に食べない悪魔の定食だ。なにせこの担々麺のスープは単体で飲むには少し辛く作っている。ゆえに人はスープに替え玉または――白いご飯を投入したくなるのだ、恐ろしいことに。ご飯はお代わり可能です。

担々麺も餃子も脂っこいから口が疲れるのではないか、などという心配は無用だ。今日の餃子のタレは酢の割合を増やしさっぱりした味付けのもので、それにより自然と餃子とご飯入り担々麺スープを交互に食べることになる。箸休めのお新香も加われば胃拡張間違いなし。

そして私は、レッドさんに禁断の一言を告げる。

「餃子のお代わりもありますよ」

「僕も!!」

レッドさんよりネズ君の反応が速かった。この反射神経の良さはポケモントレーナーとして将来有望だろう。

第三便の餃子の山と共に自分の分の担々麺を作り食卓についたが、まだなおレッドさんとネズ君は無心に餃子を貪っている。時計を見ればあと三十分で二時だ。

「ネズ君、そろそろご馳走さましない？　もう一時半だよ」

「えー、まだギョーザ食べたか！　今日くらい午後のスクール行かんでも良かばい」

「まあまあそう言わずに」
　十歳まで通うスクールでは低学年の間、家でご飯を食べる。家に戻り学校へまた行く時間のために昼休みは長く、高学年が五時間目の授業を受けている時間も昼休みとされている。私の記憶が正しければ六時間目は二時からのはずだ。ここからスクールまでは徒歩で十分程度だが、六歳の子供の足ではその倍近い時間が掛かるだろう。
「お姉ちゃんが一緒に門まで行ってあげるから、午後もスクール行こ?」
「えー……」
「お姉ちゃん、ネズ君の行ってるスクールを見てみたいなぁ」
　私にとっても母校だからどんな場所か知らないわけがない、まあ方便というやつだ。
「どうしようかなー」と体を揺らしながら言っているネズ君に――なんとレッドさんが、レッドさんが声を出した!
「……ぼくが行く」
「レッドさんが喋った!」
「レッド兄ちゃん口きけたと!?」
　我ながら散々な言い様だとは思うが、今までレッドさんの声を自己紹介の一度しか聞いたことがなかったため本気で驚いた。
「ネズ、一緒に行こう」

ネズ君は瞳を輝かせて頷いた。お姉ちゃんよりお兄ちゃんが良いのかと少し凹んだが、トレーナーを目指している男の子には、ツボツボしか持っていない変なお姉さんよりトレーナーとして経験のある年上のお兄さんの方が嬉しいだろう。

いそいそと二人で出かける準備をする二人を見ながら心の中でちょっと泣いたがすぐに気持ちを切り替えて担々麺を啜り、白いご飯と餃子を食り、お新香でほっこりとため息を吐いた。ほうじ茶を淹れて食後の時間を過ごしていればもう二時十五分。レッドさんが戻ってきた。

「お帰りレッドさん、ネズ君と一緒にスクールまで行ってくれて有難う」

給湯器からお湯を注いでほうじ茶を淹れレッドさんに出せば、いつもの真顔で頷いて椅子に座った。

「校門で引き留められたでしょう、お疲れ様です」

スクールに通う子供のほとんど全員はポケモントレーナーを目指している。私の様に「さらばガラル飯！　貧しい味覚とは縁を切るぜ！」とガラルにバイビー（グリーンのマネ）するための訓練所と割り切っている子供は例外中の例外で、誰もが推薦状を得ることを夢見てスクールに通っている。

そんな夢見る子供たちの前に、腰にモンスターボールを六つもぶら下げた若いポケモントレーナーが現れてみろ……間違いなく取り囲まれて質問攻めにされる。六歳から

八歳までのボーイズ＆ガールズは遠慮という言葉を知らないから、チャイムが鳴ってもレッドさんをスクール内に引きずり込もうとしたに違いない。

大変だね。

――ヨクバリスからきのみを奪ってカレーを作ったり、親や親戚の好意で酷い物を食わされたり、ワイルドエリアでキャンプする時にレッドさんがネズ君を連れて野生のポケモンに喧嘩を売りに行ったりして過ごすこと五日。

カントーに帰る私の脚にネズ君が抱っこちゃん人形のごとくしがみつき、大声で泣きわめいた。

「お姉ちゃん帰らんとって！　ヤダ！」

「ごめんねネズ君、お姉ちゃんもお仕事があるんだよ……」

「お姉ちゃんおらんと人参美味なか！　ママのご飯まずい！」

気持ちは分かるがそんな直接的な表現でママの料理を貶すのは止めるんだ。君の後ろにママがいることは知ってるだろう、君がママの料理を貶すことでママに睨まれるのは私なんだぞ。とてもいたたまれない。

「ネズ君、また来るから。その時また一緒にご飯作ろう。ね？」

「お姉ちゃんガラルにおれば良か！　なんでカントー行くの！」

「お姉ちゃんのおうちはカントーにあるんだよ……」

どうにかママこと従姉がネズ君を引き剥がした。目元も鼻も真っ赤で哀れを誘う姿に後ろ髪を引かれないではないが、私には帰るべき場所がある。

「ネズ君、強く生きるんだよ……」

私の記憶が正しければ、剣盾でスパイクジムのジムリーダーをしているネズは白と黒の髪の若い男だ。従姉甥のネズ君も白黒の特徴的な髪をしているし、ネズ君の他に白黒バイカラーの髪の少年を見かけたことはない。またガラルには既にマクロコスモス社がある。だからネズ君が将来のジムリーダー・ネズで間違いない。

しかし、あの様子を見るとネズ君もカントーに来そうだ。本当にジムリになるのだろうか。

カントーに戻れば「イッシュ地方で有名らしいシフォンケーキを作ってみたい」とタケシさんに誘われ、荷解きから数日後にガラル土産の紅茶缶やスコーンを携えニビシティへ。ちなみにレッドさんはさっさとシロガネ山に戻ってしまったため、ニビシティに向かったのは私一人だ。

グリーンさんには「どうしてレッドを捕まえておかなかったんだ！」と怒られた。私がレッドさんを引き留められる訳がないだろう、そんな無理を言われても困る。

シフォンケーキはタケシさんだけで作るのだが、タケシさんは洋菓子について詳しくない。ある程度とはいえ洋菓子の知識がある私にアドバイスがほしいということらし

かった。

「卵の白身を泡立てたものがメレンゲだということは分かったんだけど、ここの『メレンゲに角が立つ』というのもどういう意味なのか分からなくてね」

「あー……優しくない表現ですよね、それ」

シフォンケーキを作る際、メレンゲにはある程度の固さが必要だ。メレンゲが緩いとシフォンケーキが膨らまないだけでなく型から外す時にケーキが崩れやすくなる。そう説明すればタケシさんの剛腕が唸り、見る間の内にちょっと固すぎるメレンゲになった。緩いよりは良いだろう。

予熱したオーブンにケーキを入れて焼きあがるのを待つ間、タケシさんからまさかの相談が来た。

「カスミにプロポーズするつもりでね、年頃の女の子はどういうシチュエーションを好むか教えてくれないかい？」

「えっ、もう交際されていたんですか？」

「いいやまだだ。でも交際するなら結婚が前提だろう？　指輪なども準備しようと思っているんだが、カスミがどんなシチュエーションやプレゼントを好むか分からなくてね。もっと小さい子の好みなら分かるんだが……」

両親がドロンしたタケシさんの家はまだ幼い弟妹が多い。年下とはいえ年頃の女の

子の好みがどんなものか分からず相談してきたのだろう――しかし、交際の申し込みで指輪は重い。

「タケシさん、真剣な交際をすることはとても良いことだと思いますが、指輪は気が早いです。私はカスミさんがバラの花を好きかどうかは知りませんが、交際の申し込みならベタにバラの花束などが良いと思いますよ」

花ならどうせ枯れるが、指輪はずっと付けるものだ。タケシさんや私が選んだ指輪ではカスミさんの好みではないデザインの指輪を送ることになりかねないし、交際が始まってから一緒に選びに行ったらどうか。

そう説明すれば、なるほどとタケシさんが頷く。

「君に相談して良かったよ」

「いえいえ、お役に立てたなら良かったです」

後日、タケシさんとカスミさんは正式にお付き合いを始めた。カスミさんが十六歳になり次第籍を入れるそうだ。

二人で選んだ婚約指輪を三人の姉に見せつけて自慢し、姉たちを煽りに煽ったカスミさんは彼女たちから殴る蹴るの暴行を受けズタボロにされたとか。可哀想に。

店長たちから回ってくる釣り書きはちょっとごめんこうむるとはいえ、私にも結婚願望がある。料理が上手くて頼りになる旦那がほしい……でもまあそのうち、気が向いた

ら、あと五年くらいは一人でふらふらしていれば良いけれども。私にはフーディン（レベル七十、♂）もいるし。

そう思って気ままに過ごしていた私の下に届いた連絡は。

ポケモンを悪用する犯罪組織がダイマックスした状態のポケモンを連れスパイクタウンに侵入、いくつものビルが押し潰され、数多くの死者が出た。

被害者の中にはうちの両親や親戚……そして従姉夫婦。

犯罪組織が幅をきかせ治安が悪いガラルに幼いネズ君とマリィちゃんを置いておくわけにゆかず、金銭的にも体力的にも余裕がある私が二人を引き取る事になった。ガラルの一時保護施設で再会したネズ君は私が抱きしめても前に空港で別れた時の様に泣いてくれず、私ばかりわんわんと泣いた。

私がこの子を支えるんだ、そう決心した。

しかし残念なことに、私はそのようなお綺麗な覚悟を初志貫徹できるスーパーアルティメット聖人ではない。

九歳の子供に突然の両親の死が受け入れられるだろうか？　無理だ。そのうち乗り越えられるかもしれないが、三週間かそこらで受け入れられる類の問題ではない。ネズ君は我が家――といっても借家――の隅で体育座りし闇を生成し、そろそろ二歳のベイビーことマリィちゃんは突然な環境の変化のせいで泣いてばかり。一応とつくが社長

である私は工場で仕事をしなければならない。時短勤務は権限を代理してくれる人がいてこそ叶うのであり、社長の私には……そんな人がいたら良かったのに。

まだ半月なのに既に私は疲労困憊だ。

困り果てた私はタケシさんに泣きついた。子供の世話のプロと言って過言ではないタケシさんなら何か良い案を持っているに違いない。

「お手伝いさんを頼むのはどうだ？」

「それも考えたんですけど、ネズ君は私以外を警戒しているようでして……。グリーンさんがうちに遊びに来た時、凄い悲鳴を上げたんです。驚いたマリィちゃんも泣き出すわネズ君が物を投げまくるわ、近所の方の通報でジュンサーさんが来ました」

「ううむ、そうか……。なら他に知り合いはいないのかい？　たしか君はレッドと一緒にガラルに行っていただろう」

シロガネ山の引きこもりはポケモン関連の要件でなければ下山しない、引きこもり界のレジェンドだ。ポケモンバトル界のレジェンドでもあるが。

そんな（普通なら辿り着けないシロガネ山に本人が引きこもっていることもあり、物理的な意味も含めて）高嶺の存在なレジェンド・レッドさんだが、彼とはガラルまで一緒に行ったり、彼をガラルの実家に泊めたり、私の縁（スクールの同級生）で育て屋を彼に紹介したこともある。ネズ君の世話をちょっとくらい頼んでも良いような親しい

間柄にある、と言っても良いのではないだろうか。
「レッドさんなら静かですし、ささくれだったネズ君のハートをむやみに刺激することもないでしょうね。レッドさんに頼んでみます」
「……レッド以外に誰かをガラルへ連れて行ったことは無いのかい？」
「ええ。カロスとイッシュにはナナミさんと観光旅行したりホウエンに社員旅行したりしたことがありますけど、ガラルへはレッドさんだけですね」
何が楽しくて飯が不味い場所に親しい友人や世話になっている社員を連れていかなければならないのか。旅行は現地の美味しい物に舌つづみを打ってこそのものだ。
カロスで食べた料理は本当に美味しかった。カロスはフランスをモデルにしているだけのことはあり、どのレストランでも素晴らしく幸せな食事の時間を過ごせた。色々と食べた中で一番記憶に残っているのはムール貝の酒蒸しだ。貝類が苦手ではないなら是非食べよう。
イッシュはまあ、見た目が（食紅などで）鮮やかなケーキがショウウィンドウに並んでいたから見なかった振りをしたり、生地が既にかなり甘いクッキーにチョコチップが混ぜられていたせいでブラックコーヒーをがぶ飲みしたり、口を開けられなくなるほど粘着質で固いヌガーで歯が溶けそうになったりしたが、ファストフードを中心に肉と脂に満ちた食事はなかなかに美味しかった。毎日食べるのはごめんだが、旅先で食べる程

度なら許容範囲内だ。
だがガラルは――ガラルは駄目だ。出身地だからこそ見える大小様々な粗が気になって楽しめないし、朝食以外の料理がたいてい美味しくない。
「ならレッドに頼む以外になさそうだが……レッドは動くだろうか」
「頼んでみて、無理ならその時また考えますよ」
というわけでフーディンに「親戚の若手が私を除いて全員ＤＥＡＤ、引き取ったネズ君ショックでヒッキー、ＹＯＵ子供の相手ヘルプミー」という内容の手紙を持たせたところ、五分後に一匹で帰って来たフーディンは何故かてきぱきとネズ君の着替え類をリュックに詰め始めた。
「フーディン、どうしたの」
声を掛ければ私を振り返り、親指（だろう指）を立てるフーディン。一体ネズ君をどうしようというのか、嫌な想像が頭に浮かぶ。
サイコキネシスでふよふよと手元に届けられた紙はノートの切れ端で、そこにレッドさんの字が書かれていた。「一週間」。一週間が何なのか。一週間何をしようと言うのか――顔を上げれば、フーディンがネズ君の肩に手を置いていた。
死んだ目のネズ君がゆっくりとフーディンを見上げたその瞬間、一人と一体の姿が掻き消える。

「いやいやいやいやいや何してんだアレどういうことだ」
　頭はホットだが行動はクールに。動揺を顔に出す奴はベトコンだ、動揺を顔に出さない私は訓練されたベトコンだ。迷わず指が動きグリーンさんの携帯に電話を掛ける。
「グリーンさんネズ君にフーディンをキッドナップ!!」
「今なんて?」
　ジムから飛んできてくれたグリーンさんに、レッドさんがネズ君をシロガネ山耐寒訓練に誘拐したと泣きついた。ネズ君は家の中で二週間も引きこもって過ごしたのだ、体力が落ちていることは間違いない。エアコンを入れているからネズ君は薄着で、シロガネ山の洞窟との気温の差は少なくとも十五度以上ある。間違いなく風邪をひく。
　レッドさんが向こうで引き留めているのかフーディンが帰って来ず、詳しく話を聞かせろとレッド君に伝えることもネズ君を連れて家に戻ってくるようにと命じることもできない。もしネズ君が死んでしまったら、それもこんな馬鹿々々しいことで死んでしまったら従姉たちにどう謝れば良いのか。
「レッドあのバカ!――何かあいつから伝えられたことはないか?」
「手紙に一週間って書かれてました」
　グリーンさんは頭を掻きむしった。
「一週間で分かるかよバカ!　一週間預かるって意味だろうけど!　いいか、おれは今

から準備してシロガネ山に登るから、おまえはここで待ってろ！」
「ええっそんなここで待ってなんていられませんよ！」
「おれは雪中登山の装備があるし洞窟までの往復に慣れてるけど、おまえは何も持ってないだろ！　おれの言う事を聞け！」
「それはそうですけど……でも！」
「滑落して死ぬ事件なんてざらに起きてるんだ。おまえの手持ちに雪山に慣れたポケモンがいるわけでもないし、役に立たないんだよ！……何かしてたいって言うなら料理でも作ってたらどうだ。きっとここに帰る頃にはあの坊主もおれも腹が空いてるだろうからな」
　混乱で頭がパーになっていた時には分からなかったが、後から考えれば、グリーンさんの発言はかなり頼りがいがあり格好良いものだった。が、二日後に家へ帰って来たフーディンから「レッドたちと一緒に、おれはこれから二週間シロガネ山に籠る。おまえからジムに連絡しておいてくれ。ネズは筋が良いな！　あと飯が足りないから送ってくれ。作りたてを食べたい」というグリーンさんの手紙を届けられ、ポケモントレーナーの言葉を信用してはいけないと教えられた。
　これだからポケモン廃人は糞。
　――マリィちゃんを背負って仕事をし、時々ナナミさんや友人が手伝いに来てくれて

ぐっすり寝たりして過ごすこと約一ヶ月。はじめ一週間と言っていた山籠りは期間延長を重ねてようやっと終わった。ちなみに山籠り開始から十日ほどした頃にゴールド君がトキワジムを訪れ、私の必死の制止も聞かず「おれも行ってくるッス！」とシロガネ山雪中訓練に参加したお陰で私の心労は倍増した。ふざけるなポケモンマスターども。

カントー、ジョウトを代表するポケキチ三人に修行をつけてもらった果報者ネズ君が明るくなって帰って来たのは良いことだが、このところずっと胃が痛い。

「胃に優しいものを食べたい……そう、こんな時に食べるべきはおかゆ＝サン！　サムゲタンではないッ！」

「ついに頭がおかしくなったのか？」

「中華の姉貴大丈夫っすか」

「グリーンさんの反応が非人道的過ぎてびっくりですよ……文句があるなら家に帰ってください。ゴールド君はありがとう。でも今回の件についてちょっとは反省しようね」

レッドさんも私の頭を心配するような表情を浮かべている。理不尽だと思う。

沈んでいるネズ君を元気づけようとしての行為だったことは分かっているが、私が一ヶ月のあいだ気を揉みながら過ごした原因はレッドさんだ。そういう対応をされるととても理不尽だと思う。

「今日はお粥ですからね」

そうは言っても、ただのお粥ではない。カニ出汁のお粥だ。先日オーキド博士の研究所でポケモン同士の喧嘩があり、フシギダネのはっぱカッターがクラブの腕の付け根に命中、その美味しいカニの手をナナミさんから頂いたのだ。

というわけで今日のお粥はカニの殻出汁の豪華なお粥だ。なおカニの身はまだたっぷり冷蔵庫にあり、近いうちにカラシマヨとあえてカニマヨピザを焼くつもりでいる。

「お粥なんて食べたところで腹なんか膨れないだろ。おれは帰るぜ」

「おれは食べていくっす」

「姉ちゃんお粥って何？」

グリーンさんが帰ったので、欠食児童三名と幼児一名に私の分を作る事になった。カニの出汁は香りが特徴的ですぐ分かる――ゴールド君が「クラブの出汁だ！」と歓声を上げ、ネズ君も「美味しそうな匂いがする」と笑顔だ。ほんの一月前にはこの世の終わりのような顔をしていたのに。やはりネズ君もレッドさんたちと同じポケモン廃人ということなのだろう。

カニの身をちょっとだけ入れたお粥は美味しい。カニの出汁を使って美味しくなくなる訳がないのだ。はふはふと美味しそうに食べるネズ君、黙々と食べるレッドさん、「美味い美味い」と言いながらお粥を掻っ込むゴールド君、スプーンを口の前に持ってい

く度に首を伸ばして食いつくマリィちゃん。グリーンさんも可哀想に、カニの出汁を気前よく使ったお粥はこんなに美味しいのに、帰ったから食べられないのだ。ただのお粥と思ってさっさと帰った自分を恨むが良い。

マリィちゃんの食べ残しとお鍋のお粥を七味唐辛子で味変しながら食べ、食器を洗える良い子のゴールド君に片付けを任せて食後のお茶を淹れ――蜜掛け煎餅を出した。雪○宿だ。

シンオウ地方の煎餅メーカーが作ったというこの雪○宿はまさしく私が知っている○の宿で、適度なしょっぱさのサラダ煎餅に白い蜜が散っている甘じょっぱくて美味しいお菓子だ。膝の上に乗せたマリィちゃんはにんじんビスケットとミックスジュースを盛大に溢しながら食べ、「うまー」と言いながらテーブルを叩いたり体を揺らしたりと忙しい。

「マリィちゃんご機嫌ですねー、ネズお兄ちゃんが帰って来たからかな？　嬉しいねー」

――しかし、そんな風にゆったりと時間を過ごせたのはたったの数日のことだった。突如ネズ君が「一人でガラルに帰る」と言い出したのだ。

理由はただ一つ、ガラルの旅立ちの歳は十歳なのにカントーは十一歳だから。

数ヶ月後に開始されるジムチャレンジに参加できないと知ったネズ君は拗ねに拗ねた。ガラルに戻れば半年足らず待つだけで済むのに、カントーでは更に一年待たなけれ

ばならない。そんなことは耐えられない、ガラルに帰る、と暴れまわったのだ。

そろそろ十歳になる九歳児の手加減を知らない腕力はかなり痛いが、それがカントーの決まりだから諦めてもらう他ない。既に私が後見している都合上、私にはネズ君を保護し監督する義務がある。

「姉貴のあほ！　ばか！」

「あほって言った方があほなんですー。ネズ君はガラルのスクールに通ってないから推薦状を貰えませーん残念無念また来年」

「だからガラルに戻る言うとるばい！　おれなら推薦状貰える！」

ガラルのスクールの友だちに後れを取るのがよほど嫌なのだろう。ネズ君は「十一歳でジムチャレンジなんてみっともない。そんなの嫌だ」と言って泣き出した。

みっともないだのなんだのというのはただの思い込みだ。私の幼馴染は二十になった今も毎年ジムチャレンジに挑んでいるし、それをメディアや観客から揶揄されることはない。その年に一番強かった人がチャンピオンになるだけであり、ジムチャレンジには十歳以上という参加年齢の足切り以外の制限はない。誰もがチャンピオンになれる可能性を持っている。十歳でなければチャンピオンを目指してはいけないなんてルールはないのだ。

しかし九歳児にそれを理論的に説明したところで納得してくれるわけもなく、ネズ君

と私の衝突は半年近く続いた。その年のジムチャレンジが始まったことでようやく諦めてくれたが、長い間じっとりとした目で睨まれ続けた私の心労は語り切れない。

そしてネズ君が十一歳になったジムチャレンジの季節、私はネズ君をガラルに送り出した。レジェンドとそのライバルからの推薦状を持たせて。

ふざけろねがいぼし

ジムチャレンジ用品――リュックとかテントとかシュラフとか――は荷物になるため、ジムチャレンジ慣れしたガラルの幼馴染に購入の付き添いを頼んだ。私はガラルでもカントーでもジム巡りをしたことがなく興味もない。どれが良いかなど全く分からないから幼馴染に丸投げした、とも言う。

「いくらでも値が張っても良いから軽くて丈夫で便利で防犯性の高い奴にしてね。人の物を盗むような不届き者がジムチャレンジをしていたりトレーナーをしているとは思いたくはないけど、念には念を入れて防犯性能がリザードン級のを頼む」

『心配しすぎ、そこまでしなくても大丈夫だって。レンジャーとかジムのトレーナーが毎日ワイルドエリア内を見て回ってるからそこまで良いのを買う必要ないし、防犯性リザードン級となると頭おかしい金額になるよ?』

「いいや、ネズ君には一番良い装備を頼む。ネズ君に私名義のクレカ渡してあるからそれで支払ってちょうだい」

『考え直しなって、マジで高いから！　リザードン級の防犯性能があるキャンプセットとか目を剥く金額だよ?　破産しても知らないよ』

「大丈夫だ問題ない」

幼馴染に私の財布の心配はしなくて良いと押し通して通話を切り、つい昨日ガラルへの飛行機に乗った可愛い従姉甥のことを思う。

カントーからガラルへ行くと時差ぼけがあり、ジムチャレンジの準備などはカントーではできない。また、他地方のジムリーダーの推薦状は事前に提出して確認してもらわなければならず、ガラルのジムリーダーの推薦状と違い「開会式の二週間前までに提出するように」と参加要項に書かれている。だから式の三週間前くらいにはガラルに戻る必要はあるのだ。

ジムチャレンジ開始はまだ一ヶ月半も先でまだまだ余裕があるというのに、ネズ君は「早く行って向こうで調子を整えるばい」とやる気満々で旅立ってしまってお姉ちゃんは寂しいです。

親類縁者、友人、真心カレーで知り合った編集者にも「うちのネズをよろしくお願いします」とメールを送ったり電話を掛けたりとカントーからでも出来ることをしていたら、「ようやっとガラルに戻れた！」と大興奮の電話があってからずっと何の連絡もくれなかったネズ君から、悲痛な声の電話がかかってきた。

『姉貴助けて！　飯が、飯がどれも不味い……もう我慢できんばい！』

「……そうだね」

家では「私が美味しいと思う」料理を出していたし、外食するのは五年ほどお世話になったニビシティの店や、近所の美味しい飯屋さんだけだった。――つまり私はネズ君の味覚を鍛えすぎてしまったわけで、ネズ君がガラルの飯に悲鳴を上げるのも当然のことなのだ。

ヤツの舌はわしが育てた。

『ひいばあちゃん達は「いっぱいお食べ」とか「なんでも作ってあげるからね」とか言ってくれるけど、もう無理……。こんなとこずっとおったら、おれの口が死ぬ！』

「そうだね」

ネズ君が今泊っているのは、スパイクタウンにある、私にとっての祖父母でネズ君からは曾祖父母にあたる人達の家だ。ちなみにネズ君の祖父母で従姉の両親――私にとっての伯父夫婦は、叔母が二年前の事件で後遺症が残るような大怪我を負ったことでナックルシティの大病院の近くに引っ越したためスパイクタウンを出てしまっている。

『友達に美味い飯は何かないのかって聞いても「真心カレー以外に存在しない」とか言うし、スーパーに売ってる総菜はどれも不味いし、お菓子も全部妙な味がするし、もう無理！　姉ちゃん今すぐガラルに来て！』

「うーん、お姉ちゃんにもお仕事があるからさ……今すぐにそっちに向かうことはできないよ」

『おれに死ねって言っとーと!?』

そんなことは言っていない。ただ私にも都合というものがあるのだ。可哀想な従姉甥が泣きながら助けを求めてきたのを断るのは本当に心苦しいのだが、不味い飯でネズ君が死ぬわけではないので緊急性はない。仕事を優先するのは当然なのだ。

ネズ君がジムチャレンジ中の野宿で困らないよう我が家で料理の練習をさせ、レシピも持たせている。自分で作れないわけではないのだから曾祖母の料理が口に合わないなら自分で作れば良い。

「こっちから食材とかおやつを送るからさ、それで我慢してね。おばあちゃんのご飯が耐えられないって言うなら自分で作るしかないよ」

『そんな!』

ちなみに今日の夕飯は鯵の南蛮漬け、さっぱりと酢の利いた魚でご飯が進むこと間違いなしだ。

ご飯のお供と言えば三月末から四月にかけて十キロ単位で作ったいかなごの釘煮はマリィちゃんの大好物で、ナナミさんたちにも配ったら「ねぇがマリィの、マリィの釘煮とったー!」と大泣きしたほどだ。むろん我が家の分はちゃんと確保してある。今日の夕食にも出す予定だ。

なおゴールド君に分けたら「ジョウト料理なのに中華の姉ちゃんよく知ってたっす

ね」と言われた。そういえばジョウト地方のモデルは近畿あたりだったか。

マリィちゃんの好みが渋いと思われるかもしれないが、めがぶが大好物だったり、納豆が食卓にないと泣いて暴れたり、オヤツになめ茸を啜ったりと、酒呑みもとい通好みな嗜好の子供は多い。そんな子供の一人であるマリィちゃんは特に魚介類が好きで、鰯のみりん干しやらアーモンド小魚やら貝ひもやら裂きイカやらを口に放り込むと八割の確率でご機嫌になってくれるのだ。

遠いガラルの地で美味しい料理に飢えている兄のことなど知らない妹は今、私の今晩の酒の肴になるはずだった干し飛魚を満面の笑みで貪っている。

「ねえマリィちゃん、それお姉ちゃんのお魚さんなんだけど……」

「んーん、これマリィの。マリィ開けたもん」

「そっかぁ。――ネズ君、そっちでもタラは手に入るよね？　小骨が多いから骨を抜いて、塩を振って水分を抜いて、フライにしたらどう？」

『タラのフライか……それならまあ、良いかも』

「塩だけじゃ味気ないし、そっちでも手に入る調味料なら……クレイジー〇ルトとカレー粉が良いと思うよ」

スモークサーモンをわさび醤油で食べるのも良いのだが、ネズ君に持たせたわさびチューブは一本だけで醤油の量も有限だ。料理の手間がいらないスモークサーモンを

わさび醤油で食べるという楽な道に逃げ続けることは難しい。なにせガラルにはカントーやジョウト、ホウエンの食材を置いている店などないのだから。

あれは十年以上前……ガラルにバイビーする二年前のことだ。エンジンジムのジムリのカブさんがホウエン出身だからエンジンシティにはホウエン地方の食材を置いている店があるに違いない、と考えた当時八歳の私は、真面目に貯めたお小遣いを握りしめエンジンシティに行った。

地元のおばさん方に訊ねたのはもちろん、町の観光案内所へ行って他地方の食材を置いている店がないかと聞いたが、結果は「そんなお店なんてないわねぇ」だった。

一体どういうことだ。自分たちのジムリの地元なら興味を持つものではないのか――確かにカブさんはメジャーとマイナーを往復していてちょっと頼りないジムリに見えるかもしれないが、ならばジムリを町全体で支えようという思わないのか？　ただでさえ他所からやって来たトレーナーなのだ、カブさんは衣食住様々な点で苦労しているに違いない。カブさんはまだ二十代はじめの若者でしかないのだから、周りがサポートしてあげるべきではないのか。食だけでもホウエンの味を楽しめる店を作ってやろうとか、ホウエンの調味料などを店に置こうとか思わないのか。

町全体でジムを応援しているスパイクタウンとは大違いだ。

シティの奴らは心が冷たい。都会の人々は、ソーシャルディスタンスは近い癖に、

ハートのディスタンスは遠いようだ。大事なのは……心。そうでしょ……ガラル！

ホウエン産調味料入手の願い破れ、ジム近くの公園でしょんぼりとベンチに座っていた私に――しかし、なんと、声を掛けて来たのは若きカブさんだった。額に首に汗が伝っていたのはランニング中だったからだろう。

「君、どうしたんだい？　親御さんとは待ち合わせかな」

知らないかなぁ、ぼくはこのジムのリーダーだから、変な人じゃないよ。そう爽やかに笑ったカブさんはとても親切で、その人徳の高さが初対面でも分かるほどの澄んだ目をしていた。知ってますよと頷いてベンチを勧めれば、カブさんは「では失礼して」と私の横に座った。

「カブさん、この街の人に虐められてませんか」

「虐められてる？　ぼくがかい？」

「そうです。だってこの街の人たち、カブさんはホウエン出身なのに、ホウエン料理のお店を出したりホウエンの食材をお店に置いたりしてないんですよ。応援してるなら、カブさんがホウエンの料理を作れるようにお手伝いしたりしてくれるものなんじゃないですか？」

ガラル生まれガラル育ちの私ですら、ガラル料理が美味しくないことが分かるのだ。いわんや他の飯が旨い地方の出身者。飯が不味い、水の味が違う、畳がない、顔の作り

が違う、友人も親戚もいない、文字が違う――異郷に単身乗り込んだカブさんが苦労していないはずがない。

そう伝えればカブさんは目を丸くした後に破顔した。

「君は優しい子だね。だけどそれは違うよ、ぼくがお願いしたんだ。ホウエン料理を食べたりホウエンを思い出すものを見てしまったら、家に帰りたくなってしまうかもしれない。だからホウエンの物は置かないでくれって頼んだんだよ」

カブさんは修行僧だったのか……？　健常な味覚の持ち主が毎日ガラル式味覚破壊料理を食べるなど拷問でしかないだろうに。自らそのような拷問を受けて修行しているから澄み切った目をしているのだろうか？　ガラル飯で日々徳を積んでいるのか。

ストイックすぎる。

「心配してくれて有難う。人の事を思いやれる君は素敵なレディーだね」

――それからエンジンシティを訪れることなくカントー地方に飛んだので、カブさんと会ったのはその一度きりだ。

ということで、比較的カントーに近い味覚を持った地方の出身者がジムリーダーをしているエンジンシティにも、カントー、ジョウト、ホウエン、シンオウあたりの調味料を置いている店はない。ちなみにカントーと比較すれば、ジョウトは薄味、ホウエンは甘め、シンオウは濃味だ。

「ガラルのどこを探してもカントーの調味料はなかったから、ネズ君もはやく諦めて自炊した方が良いよ」

『信じたくない！　そんなの嘘だぁ！』

電話の向こうで現状を嘆く言葉がしつこいほど繰り返されるが、三週間前に行けば良いものを六週間前に旅立つと決めたのはネズ君だ。私はちゃんと止めた。

「タラのフライにレモン汁をかけて食べたらさっぱりするよ。じゃあお姉ちゃんはこれから夕飯の用意しないといけないから、切るよ」

四本入りの干し飛魚が全てマリィちゃんに駆逐され空袋が床に落ちていたのを拾い、二度と酒の肴をお膳の上に置きっぱなしにはしないと決めた。

明日、ネズ君に送る食材と一緒にもう一袋買おう。

麦茶を飲んでいるマリィちゃんに声を掛ける。

「きんぴらごぼうが好きな人、手を挙げて！」

「はい！　マリィこんぴや好きー！」

「なんと！　今日の夕飯は、鯵の南蛮漬けと、きんぴらごぼうです！」

「キャー!!」

マリィちゃんは舌が肥えているというか、カントーの味付けで育てたからカントー料理が大好きだ。マリィちゃんはカントーでジム巡りをするのだろうか、それとも剣盾の

ゲーム通りにガラルでジムチャレンジをするのだろうか？　どちらを選んでも応援するつもりだし、もちろんトレーナーを目指さないというのもありだ。例えばうちの会社を継ぐとか。

しかし、もしゲーム通りにガラルでジムチャレンジをするのなら――今のネズ君のように食事で苦労をする。保護者としてはお勧めできない選択肢だ。

それでもガラルで苦労する道を選ぶんだろうなと思いながら、ペットボトルの出汁を鍋に出す。私は海藻類を食べられないがマリィちゃんは食べられるので、先ず豆腐と油揚げのお味噌汁を作ってから乾燥わかめを個別に入れる。

南蛮漬けは昨日のうちに漬けておいたから味も落ち着いているだろう。

――さて、ネズ君がジムチャレンジに参加するということはつまり、ネズ君がガラルの雑誌に載るということだ。ガラルの新聞や雑誌をいくつか契約し、こちらで買えない分は伯父夫婦に購入を頼む。二年弱面倒を見た可愛い甥の覇道はラミネートして永久保存するものと決まっているのだ。

グリーンさんもジムの「トキワシティ出身トレーナー」のコーナーに早速ネズ君の枠を作り、レッドさんのピカチュウと一緒に写っている写真を貼り付けた。そしてジムの経費でガラルの雑誌を定期講読契したらしい。

「いささか気が早すぎるのでは？」

「おれさまの弟子が勝ち進まないわけがないんだよ」

納得した。レッドさんやゴールド君らもネズ君に指導をしていたから、ネズ君をそこらのアマチュアトレーナーと一緒にしてはならなかったのだ。

ジムチャレンジに関する月刊雑誌「チャレンジャーズ」や「ＬＥＴ’Ｓジムチャレンジ」では、チャレンジのシーズン前になると、今年の目玉新人チャレンジャーや以前にもジムチャレンジをした期待度の高いチャレンジャーらの特集が組まれるのが恒例だ。

私の幼馴染も毎度バッジを七つか八つ集められる実力があることと、チャンピオンになるのを諦めず毎年ジムチャレンジを繰り返していることで、何度か個別の記事が載った。

不屈のチャレンジャーが個別の記事になるのに、『レジェンドの推薦』を受けたチャレンジャーが記事にならないわけがない。開催直前準備号には当然ネズ君特集が組まれていることだろう……そう楽しみに思っていた。

しかし開会二週間前に出た「チャレンジャーズ」にも「ＬＥＴ’Ｓジムチャレンジ」にもネズ君のネの字もなかった。いや、新顔チャレンジャー一覧に顔写真が載ってはいる。他の有象無象と同じ扱いだ。おかしくないか？

「前チャンピオンの推薦状を受けたこのパックリだかポックリだかという奴が見開き記事なのにネズ君がコレ？　は？　レジェンドの推薦状舐めてんの？」

「すいせんじょーってなに？　マリィもすいせんじょー舐める！」
「推薦状は飴じゃないの、ごめんねマリィちゃん」
　――そう腹を立ててグリーンさんに怒りのメールを送ったら三十分後に電話がきた。グリーンさんによれば、推薦状の確認があった後にリーグ運営から連絡があったらしい。大混乱が予想されるため円滑なリーグ進行のためには公表できない、他地方からの推薦者という枠でのみ発表する、と。
「いやいや、そんな馬鹿な。グリーンさん達本人が出るわけでなし、二人の推薦状を持っているチャレンジャーというだけで大混乱なんて起きるわけがないじゃないですか」
『だよなぁ……おれもそう言ったんだが、あちらさんは「もう決まった事ですので」とけんもほろろだった』
「そんな！」
『全くつまらない奴らだぜ』
　私もグリーンさんも、我が家に週一でご飯を集りにくるレッドさんも、ネズ君の特集記事を楽しみにしていたのだ。我々がそんな適当な理由で納得すると思うなよ。教えてやろう、うちのネズ君は最強なんだ（集中線）!!
　トックリだかソックリだか知らんが、前チャンピオンの推薦者が見開き記事でネズ君の写真が２センチ×１．５センチなのは天が許しても私が許さん。我が一族期待の星、

スパイクタウンを背負う男、ゲームでは天才ミュージシャン兼ジムリーダーとなった哀愁のネズをこんなぞんざいに扱ったことを後悔させてやろう。

やり過ぎ？　そんなことは知らん。私はモンペだ、うちの子が主人公役をしなければ気が治まらんのだ。うちの子が桃太郎でなければ許さん。

「実はですね、私ガラルの出版社に伝手がありまして……」

『おれが許可する。やれ！』

というわけで、真心カレーで無理をお願いしたタウン誌のスパイクタウン・ダッシュ社と、真心カレーの取材の為に記者がカントーまで来てくれたことのある、政治記事から明日の献立まで網羅しているウィークリー・ガラリアン社にネズ君の情報を売った。

開会式当日に店頭に並んだウィークリー・ガラリアンの目玉記事はもちろんネズ君。親戚全員、一人につき三冊ずつ買った。

注目が集まったおかげでネズ君の動向がほぼリアルタイムで分かるようになり、バッジを五つ集めたニュースを我が社の社員全員――たった三人しかいないし、うち一体はポケモンだ――に伝える。

「というわけで今年の社員旅行はガラルです！　メインはガラルのジムチャレンジの観戦。良いですか、あちらのご飯には決して期待せず、自分で調味料を持っていくようにしましょう。共同でお米や醤油の類をうちの祖父母の家に送っておくというのも手で

すね。先に送っておきたい物が有る人は、再来週までに私に渡してください」
「ボス、観戦するのはネズの試合なのかニャ？」
「そのつもりです。安心してください、ネズ君の試合のチケットはウィークリー・ガラリアン経由で確実に入手できますからね」
「キャーやったー！　流石ボス！　ガラルのリーグ観戦チケットなんて当選倍率が頭おかしいから手に入る訳がないと思ってたのよねー！」
「有難うございますボス！　やったな、ムサシ、ニャース！」
「嬉しいニャー。あっちではニャースも巨大化するって聞いたことがあるニャ。見るのが楽しみニャ」
　ウィークリー・ガラリアンはリーグのスポンサーをしていて、合計十枚までならネズ君のナックルジムチャレンジとトーナメント戦のチケットを融通してくれると言っている。入場チケットが必要なのは八歳以上のヒトだけなので私たちの分が六枚、あと四枚分ある。
　二人誘える。
　タケシさんとカスミさんのところはまだ娘さんが小さいからガラルまでの長旅はできないし、ナナミさんや他の友人はさほどバトルに興味がない。店長には店がある。ならば知り合いのトレーナー連中しかない。誰を誘うか……面倒だからくじ引きで決め

よう。

――結果、ワタルさんとシルバー君という赤毛ペアになった。ワタルさんに伝えれば「ガラルか。数年ぶりだな」と快諾してくれ、シルバー君は「何故オレを誘うんだ。他の奴を誘えば良いだろう」と一度断ってきたが、ワタルさんも一緒だと言うと「行かないとは言っていないだろ」と前言を翻した。「オレのポケモンに、ガラルでしか作れないという真心カレーを食べさせてやりたいだけだ」という苦しい言い訳にはつい笑顔が浮かんでしまう。

十一月の末、今年の新人チャレンジャーの中で一番にナックルスタジアム――八番目のジムチャレンジに辿り着いたネズ君の試合を観戦するため、招待チケットでスタジアムに入場した。まだジムミッション中でグラウンドには誰の姿もないが観客席はすでにほぼ満員だ。

他人の声に耳をすます。当然のことながらネズ君への期待は大きいようで、今年もまたチャンピオンが交代するのではなどと話している。

そうなのだ。去年チャンピオンになったのはネズ君と同い年のダンデ。これから十年無敗を続ける予定の男……いや、予定は未定だ。ネズ君がチャンピオンになってしまっても構わんのだろう?

観戦のおやつは軽くて美味しくて周囲に臭いテロを起こさず、ガラルでは手に入れら

れない食べ物でビールに合うものを持ってきた――ジャーキーにシャケトバ、チーズ鱈、ちーかま、のり天、おしゃぶり昆布その他だ。いかの姿あげは匂いが強いので家で食べる。

マリィちゃんにポン〇ケのり味（小袋）を渡したら突き返されてシャケトバを盗られ、一人一袋ずつ鶏むねジャーキーを配ってニャースにはポケモン用ジャーキーをあげる。

「おい、オレは未成年だぞ！」

「それノンアルです。大丈夫、アルコールが入っていなければ問題なしです。それにジャーキーには炭酸がないとね」

シルバー君にはノンアルコールチューハイを渡し、我々成人はビールのプルタブをカシュリと開けた。剣盾の時間軸ではどうかは知らないが、現時点では観戦しながらの飲酒が禁じられていない。つまり呑んでも許される。

膝の上のマリィちゃんがシャケトバをしゃぶって涎まみれにしていたので、タオルを涎掛けの代わりに巻いてやる。マリィちゃんは魚の見た目をしたおつまみに目がない――飛魚しかり、シャケトバしかり。塩分の摂りすぎは体に悪いので、私としてはポンス〇（小袋）を食べてほしい。子供用クッキーも持ってきているのに。

「酒を飲みながら他人の試合を観戦するなんて、このガラルでもないとできないからね。君はまだ飲酒が認められていない年齢だしガラルに来るのは初めてだから知らなかっ

ただろうが、こういうポケモンバトルの楽しみ方もあるのさ」
「不真面目なことだな」
「野次馬は楽しいものさ。しょせんは他人の喧嘩だからね」
　私の右手ではワタルさんとシルバー君が真面目な話をしているが、左手に座るうちの社員は平和なものだ。ムサシさんの向こう隣に座るコジロウさんが良い呑みっぷりを披露している。
「ちょっとコジロウ、呑むのは良いけど呑み過ぎないでよ。今日はネズの応援がメインなんだから」
「その通りニャ。ニャー達もめいっぱいネズを応援するんニャから、呑み過ぎは禁止ニャ！」
「ソーナンッス！」
　猫の舌に炭酸は飲ませられないため、ニャースには美味しい水だ。勝手に出てきたソーナンスがコクコクと頷いたのをコジロウさんが「ちょ、出ないって約束したろ！」と注意してボールに戻し、「いやぁ」と後ろ頭を掻いた。
「観戦喫茶とかで試合の応援をするのは慣れてるけど、こうしてスタジアムの客席でみんなと一体になって観戦するのは初めてだからさ。緊張しちゃって……」
「まあそうね……独特の雰囲気があるわよね、スタジアムって」

「熱気も凄いニャ。明日で十二月なのにエアコンいらずだニャ」
平和に酒を呑みながら時間を過ごすこと三十分超、グラウンドにネズ君が現れた。
数ヶ月前にカントーを出た時より凛々しく、しかしかなり痩せている。やつれたと言う方が正しいかもしれない。試合が終わったらご飯に誘おう。
「マリィちゃんお兄ちゃんだよー、ネズ君がんばれーって応援してあげよう。ほら、がんばれー！」
「にーちゃー！　がんばえー！」
マリィちゃんの口からシャケトバが発射されたのを慌てて受け止め、驚く。――マリィちゃんがシャケトバをかじって半時間は経つというのにシャケトバの身は全く減っていない。……つまりマリィちゃんはシャケトバを食べていたのではなく、ちゅうちゅうと吸っていたのだ……！
気持ちは分かる、シャケトバをしゃぶりたい気持ちは私にも良く分かる！　適度にしょっぱく深みのある旨味がじわじわと溢れるシャケトバは、一日中吸っていたくなる魔力を持っているのだ。
食べたら消えてしまうが吸っているだけなら消えない。だから吸う。分かる……分かるがしかし、その行為は大人には出来ない。マリィちゃんには今のうちにシャケトバちゅうちゅうを一生分満喫して貰いたい。

マリィちゃんの口にシャケトバを戻し、鶏むねジャーキーの脂をビールで流しながら皆でネズ君を応援する。

私にはバトルの良し悪しは分からないけれど、ネズ君がナックルジムのジムリーダーのポケモンを鮮やかに倒していることは分かる。だが……ダイマックスを繰り出したジムリーダーを見るネズ君の目がとても物騒に見えるのは私の気のせいだろうか？いいや、気のせいなわけがないのだ。

私の両親も、ネズ君の両親も……何人もの親戚や知り合いが巻き込まれて死んだのだ。ダイマックスを嫌う方が自然で、好きになれる理由がないのだ。

ダイマックスバンドにされていない、出力が不安定なねがいぼしが使われたあの事件から、ガラルではねがいぼしの所有に免許の申請が義務になった。

何事も事件が起きてから、被害が出てから規制がなされたり、規則が作られたりする。当然だ。事件が起きる前に規則を作れと強いるのは江戸時代に道路交通法を作れと強いるようなもので、無茶苦茶な要求だ。――しかし、思ってしまうのだ。どうして私達は遺族にならなければならなかったのだろう、と。規則がもっと前からあればこんな事件は起きなかったのではないか、と。

スパイクタウンの周辺に元々ポケモンの巣は少なく、巣からダイマックスを示す光が立つこともほとんどなかったが、それらは事件後に町の総意で全て破壊され埋められ

た。

ダイマックスポケモンはただのポケモンの何十倍も危険だ。ダイマックスポケモンが歩くだけで何軒の家が破壊されることか、想像するだけで恐ろしい。

他人は言う、「ポケモンに罪はないだろう」「ダイマックスは悪いことじゃない」「ポケモンを悪用しダイマックスさせた奴が悪いんだ」「ポケモンの巣は事件と関係ないのでは?」「罪を憎んで人を憎まずだよ」と。

そんなことは分かっているとも。

ダイマックスという危険な行為を、見世物として楽しめない。ダイマックスが町の近くで発生していることを恐れずにいられない。他の町の人達なら受け入れられることだとしても、私達には受け入れられない。

確かにダイマックスはスリリングだ。圧倒的な力で格好良い。でも嫌いだ。きっと一生嫌いだろう。

鬱々とした気持ちをビールで胃に流し込めば、隣のムサシさんが私の肩に頭を乗せる。

「格好いいわね、流石はボスの甥っ子って感じ。このままチャンピオンになっちゃうんじゃない?」

「どうですかね……。そうですね、もしネズ君がチャンピオンになったら、ネズ君をイ

メージキャラクターにして中華一番の広告を打ちましょう。バカ売れ確実ですよ」
「あら、それいーじゃない。ガラルのゲロマズ料理を我が社で染め上げちゃいましょ！」
――冬至の日に行われたトーナメントで、ネズ君はチャンピオン・ダンデに負けた。
ダイマックスのリザードンに負けた。